

P1-017

母親の子育て負担感と夫婦の協力関係に関する研究

田口 禎子¹、橋本 創一²、田中 里実³、
佐藤 翔子⁴、秋山 千枝子⁵

¹駒沢女子短期大学、

²東京学芸大学、

³青山学院大学、

⁴東京学芸大学教育学部、

⁵あきやま子どもクリニック

【問題と目的】

母親が経験する子育てにおける様々な感情は、子どもとの関係性だけでなく、家庭状況、就労状況、育児や家事の負担感、夫をはじめ周囲の人たちのサポートが得られるかどうかといった環境的要因によっても生じる。本研究では、夫との関係や育児サポート、育児・家事負担感の影響に着目し、母親の育児ストレスに影響を与える要素を検討した。

【方法】

調査対象者は、都内 A 大学の研究協力システムに登録する母親および都内 B 子育てサークルに所属する母親 214 人で、調査は 2021 年 9 月から 11 月に行われた。子どもが 1 歳半～3 歳頃のことについて、①子どもの情報②母親の就労状況③家事・育児環境④夫からの育児サポート、⑤夫婦関係満足度、⑥子育てにかかるストレスを尋ねた。葉書にて研究趣旨、プライバシーの配慮やデータの取扱い等の倫理的配慮事項を説明し、同意する場合は Google Form にアクセスし、回答してもらうよう依頼した。なお、本研究は東京学芸大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（受付番号：396）。

【結果と考察】

家事・育児を家庭内でどの程度母親が担っているかを尋ねたところ、その大部分（8 割以上）を母親が負担している家庭が 6 割をこえた。（家事 61.3%、育児 63.7%）また、育児負担割合と夫の育児サポート、夫婦関係満足度、育児ストレスの関係を検討したところ、夫婦関係満足度と夫の育児サポートの間で強い正の相関が、育児負担割合と夫の育児サポートの間で中程度の負の相関がみられた。家庭内の育児・家事労働が母親に偏りがちであるという先行研究から得られている知見と同様の傾向は本調査でもみられたが、家事・育児負担が高くても、夫婦関係の満足度が高い家庭や、育児ストレスが低い家庭があることがわかった。今後は、夫婦関係についての自由記述の分析を進め、母親の子育て負担感や育児ストレスにどう関係しているかの検討を進める。

P1-018

医療的ケア児が地域で健常児と「共に生き、育つ」ための健常児の親への支援

木田 優子^{1,2}、田城 孝雄²

¹弘前学院大学 看護学部、

²放送大学大学院 文化科学研究科 生活健康科学プログラム

【背景・目的】

現在、地域共生社会において、医療的ケア児の日常生活を社会全体が支援する必要がある。医療的ケア児が地域で共に生き、育つための健常児の親への支援を考えることを目的に調査をした。

【方法】

調査対象者は、わが子である幼児期の健常児が過ごす保育の場に医療的ケア児が在籍している健常児の親 145 名。データ収集期間は 2021 年 7～8 月、無記名自記式質問紙による郵送調査法を実施した。分析方法は、健常児の親がインクルーシブ教育を受けた、及び健常児が医療的ケア児と共に過ごしている、の有無を各質問の各選択肢に関し χ^2 独立性の検定を用い、統計解析ソフト SPSS statistics for Windows (Ver.24) を用いて有意確立 5%未満として行った。本研究は、弘前学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 21 - 03）。

【結果】

有効回収率 40.7%（59 名）。回答者属性について、健常児との関係は、母親 89.8%、父親 6.8%。インクルーシブ教育を受けたことがあるは、はい 32.2%、いいえ 67.8%。健常児が医療的ケア児と共に過ごしているは、はい 55.9%、いいえ 44.1%であった。医療的ケア児に初めて会った時の思いでは、健常児が医療的ケア児と過ごしているに対する人数の違いを χ^2 独立性の検定で確認をした結果、有意な関連が見られた選択肢は、医療的ケアのない子どもと「同じ子ども」、素直、であった。また、一番多く選択されたのは、安全に過ごしてほしい、であった。医療的ケア児にはじめてと最近会った時の思いの変化で、安全に過ごしてほしい、心配、の人数にほぼ変化はなかった。そして、医療的ケア児に初めて会った時に、不安、と感じた親の中に、最近会った時の思いとして選択した親はいなかった。約半数が、共に住み慣れた地域で生活するためには、医療的ケア児の生活や医療的ケアについての正しい知識を知ることが必要、を選択した。

【考察】

健常児の親が、わが子と医療的ケア児が共に過ごす中での不安や心配は、医療的ケアが子どもの日常生活や生命を支えるものであるため、と考えた。医療的ケアは個々それぞれであり、健常児の親には理解が難しく、わが子に言えない・答えられない状況となりやすい。何事にも疑問や興味・関心を示す健常児に対し、保育職員の介入として親がわが子のモデルとなるための意識や行動への支援が必要である。